



録
八達13
加 2208
巻 8

星月夜顯晦録二編卷之三

目錄

○牧まきの方かた奸かん計けい畠山はたけやまと叙ぎえんとま

尼あま御ご臺たい二ふた品ぶつ禪ぜん室しつの薨こう逝しと歎なげきま

小山こやま朝あさ政まさ畠山はたけやま重しげ保を詳しょう論ろんの圖ず

○時とき政まさ畠山はたけやまと誅ちゅう伐はつ稻いな毛げ重しげ成なり奸かん計けい畠山はたけやま重しげ保を武ぶ勇ゆう戰せん死し

稻いな毛げ入い道どう畠山はたけやまか媒ま書しょ披ひ露ろの圖ず

星月夜二編卷之三

島山を保由比の濱に戦死の事

○武列二朕合我畠山重忠武勇戦死

重忠最期合我勇力と願と号

星月夜頭晦録二編卷之三

牧の方奸謀畠山を殺さんとす

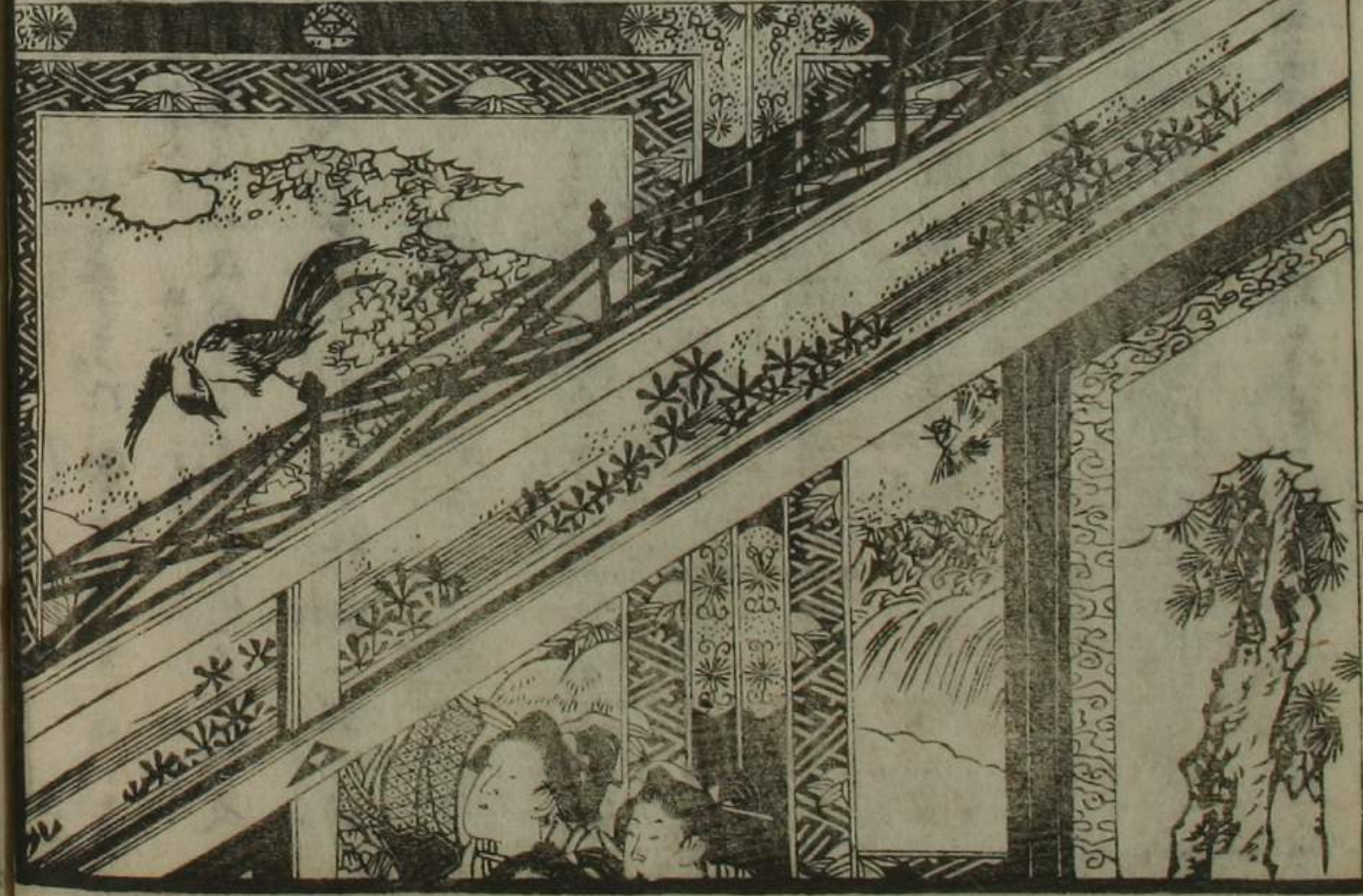
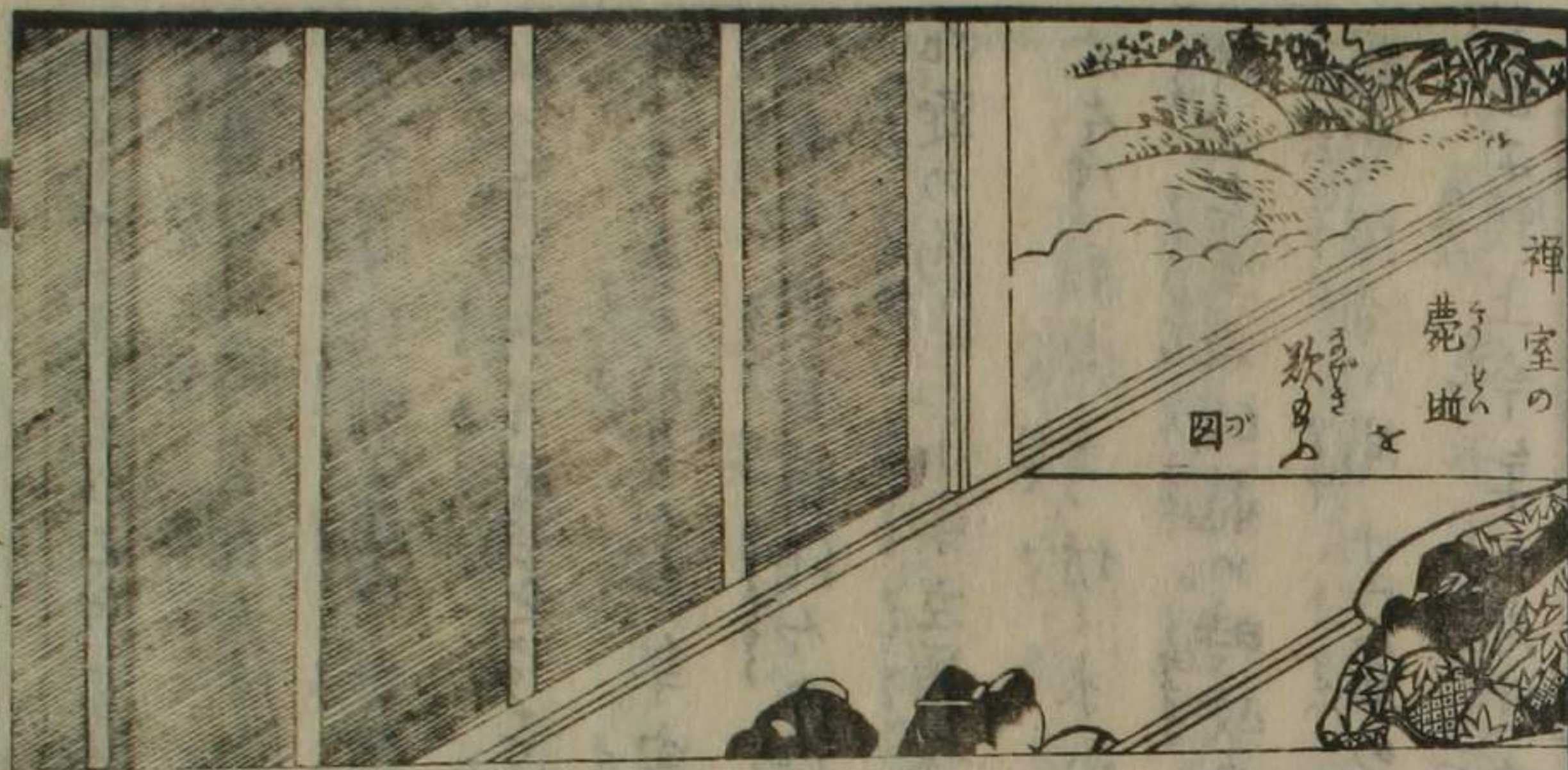
斯く猶も入道牧の方の密意を受く。計ひて邪謀空しく畠山が一言より六ヶ交るりし由へ牧の方猶もともみ深く畠山を怨み終に重忠が仇と有りたる元來重忠廣直の人なれば時政へ舅の事有悪んといはるる。老臣評定の席より時政道るぬと決す由へ気の毒なれば明白なるんを承かりし。時政の謬あるとざる振あし具負の如く。誠をかせりぬ。我も時政を却て重忠を怨む。さへハ誓くその沙汰も有りしが。牧の方時政より二品禪室を主伴とせよと當家と亡えん企し。其の心我の此度の事付。武士を伊豆へ遣し。當君の命を禪室に謀反を致さるる。外明せし事所と。件の書と致す。攻責ある。



通ぬあとも自ら断りしもの由の事。其後日、禍を獲理にとやがる
 時政もその公のり名。黠政居く返答も甚し。密に令窪太郎
 親と謀を教同六月、豆州彼吾寺にう向ふ。新親彼所に至る。二示禪
 室の住所へ控柄又打通。君は隠遁の身にて、四海太平をこそ祈り
 ろふべし。左もあはじく。動乱を好む。益むは謀反を名を立する。何れ
 ぞや。判然國の臣亦を結らんと。當時を幾再び武那ま倚ん。この書
 を送りしもの。早速は又達し。頼有。指毛入道。孫令之。百浦。れ敬
 通の證書を悉く。う上る。依く。委細。又相知。尋常の免。又あはじく。治り
 世を覆んと。謀りしもの。朝敵同前。よ由。禁庭へのナ。紙立。がけ。は。省
 免の免。其。が。う。あ。は。じ。く。厚。う。其。へ。令。せ。ら。る。む。む。む。世。を。奪。ん。と。し。の。り
 上。の。後。患。の。形。を。え。は。早。く。兵。向。ひ。は。又。措。仕。且。の。作。を。為。さ。る。如。は。ゆ。と。

演説しなれば。禪室おとあれ。せし。を。以。て。怒。の。氣。を。め。き。奇
 怪の奴が詞を。時政を討んと。あは。か。家人。亦。又。命。む。如。く。を。謀。反。と
 云べし。や。実朝の。あ。は。か。若。親。又。の。礼。美。を。あ。は。じ。く。ん。を。新。獄。屋。向。か
 へ。押。入。ら。せ。し。は。道。の。軍。を。殊。見。と。欲。せ。う。と。天。運。抽。く。時。を
 巧む。て。の。口。惜。さ。よ。と。世。の。群。又。も。あ。は。か。を。金。窪。太。郎。情。を。あ。は。じ。く。族
 され。ば。か。し。由。控。柄。を。領。又。自。害。を。と。り。あ。は。じ。く。刺。殺。を。名。を。指。さ。り。う。
 禪室の。とも。存。命。の。事。と。あ。は。じ。く。下。郎。の。手。は。切。ら。れ。う。う。い。は。は。之。暗
 り。く。強。く。自。害。し。し。時。は。元。久。元。甲。子。年。七。月。十八。日。は。年。六。三。歳。之。則
 金。窪。か。斗。ひ。う。と。金。吾。禪。室。彼。吾。寺。に。於。て。自。害。の。由。注。進。せ。し。は
 之。を。悔。ひ。て。の。由。へ。と。披。秀。し。り。う。う。て。実。朝。々。尼。の。臺。驚。を。歎。ひ。し。て。

奸邪の族の所為とん存る。自害とのもあは。是。迄。の。住。居。自



由るもさうもへと。此の底を推察し、身心悉傷限るべしと云えり。和田左門尉
 美盛、慥く性も亦も有り頼家卿の自害ありんか、世子相ありんと云ふ
 ことあり。此の明も及が、世の騒乱と云ふことと、彼をさし、実否を以て
 能くその外不審をうそを族中もなれども。時又隨ひ一言を以て力の有り。
 夫より、又正統の年、今年実朝々へ、此の臺所を向ひ、その内治法あり、防
 門前大納言信清々の息女、夫人貞節の、此の事あり。此の事あり。
 此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。
 右の度、尉常秀、佐々木小三郎盛季を、偃へ、同十月十四日上洛せり。此
 勢、又左馬次政範の、時政の末子あり、牧の方の生、亦も依り、夫婦乃
 罷愛限る。此の十六家の若冠あり、此の事あり。此の事あり。此の事あり。
 管は願上、今年九月、後五位下左馬次、又、此の事あり。此の事あり。此の事あり。

是時、今年四十歳より、此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。
 序也、相模守に任ぜり。又の時政幕下、君流人多く在り。此の事あり。
 多り、滋倉草創の老臣あり、男あり、君此一代の同時政、文政を、此の事あり。
 此の六十、余と、此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。
 見、此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。
 外戚の威、又、募せ、此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。
 若輩あり、早く、此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。
 牧の方の、若年、政範を、正使と、上洛せ、此の事あり。此の事あり。此の事あり。
 發、若痛甚、此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。
 療養を加、此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。此の事あり。
 守朝雅、去年、京都の守、獲と、在、京、此の事あり。此の事あり。此の事あり。



小山朝雅

島山重保

津浦の國



平人爲皆總令入。時又朝雅牧の方へ長文を送りて。京都の
子を生告る。又畠山重保が言。政能が死を乞死する。辨めて
と。さあ。又諫言。政能の死去。偏に重保が幼る。乞死と云送る。由
坊門大納言の消息。女用を既。又調ひ。同月廿五日。京都に發輿。
結城七郎。畠山六郎。佐々木小三郎。千原兵衛尉。木を守護する。
十二月十日。強合。よ。思あり。その年。暮元久二。乙丑年。正月五日。安朝。
正五位下。又叙せられ。同廿五日。右中將。又任。四月。上旬。強合。俄に
物さる。近國の軍兵具を用。群集を乞。小条の室家。牧
の方。去年十一月六日。愛子左馬。政能。京都。死。せ。死。辨。と
乱。悲。歎。限。り。武。義。朝。雅。畠。山。重。保。が。終。言。政。能
死。せ。ん。と。祈。り。此。老。婆。夜。又。の。怒。り。重。保。若。年。の。身。を

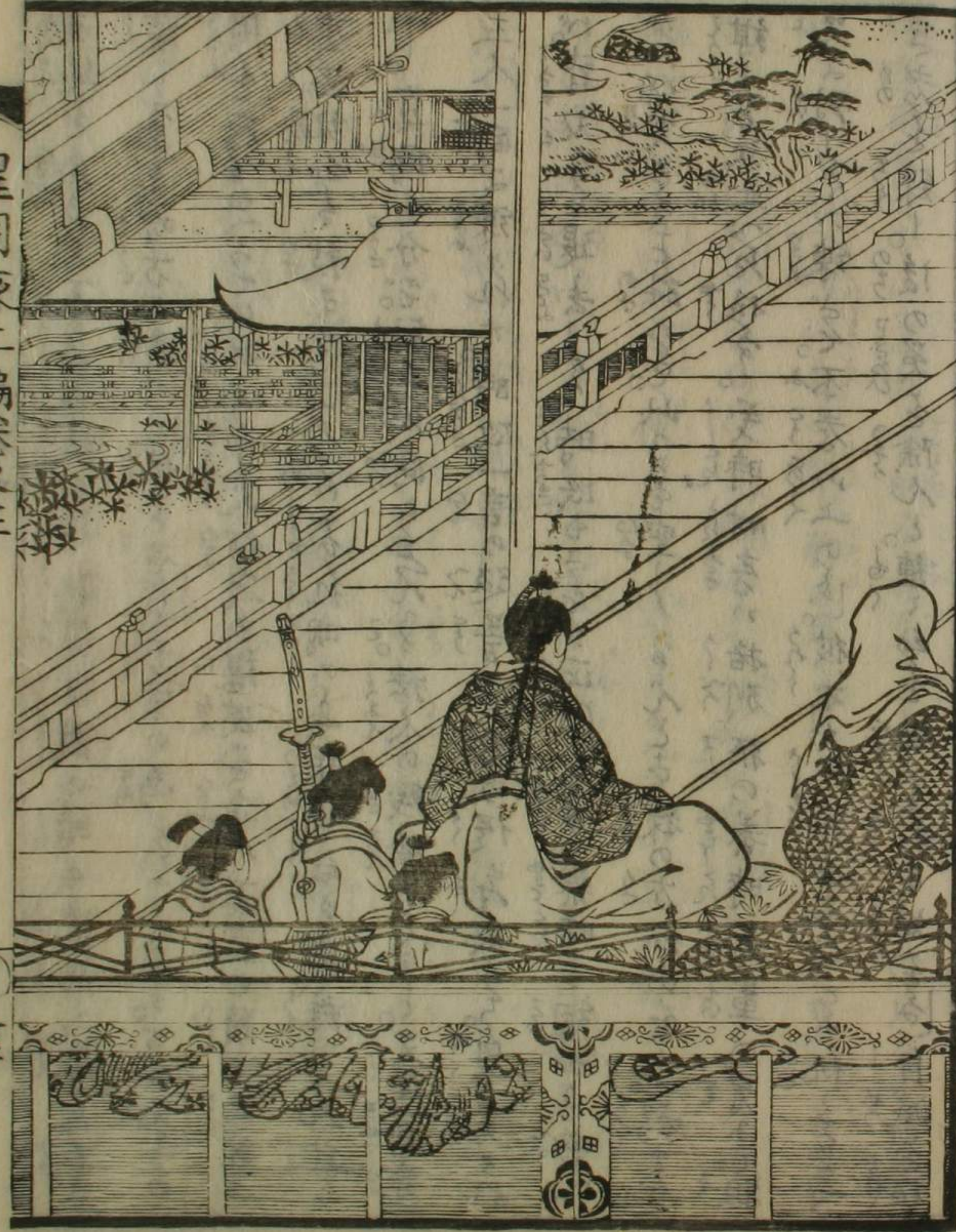
め。於。奉。勤。平生。又。の。重。忠。我。を。嘲。る。由。是。を。習。ひ。左。の。ま。る。く。
ぬ。く。彼。又。子。が。仁。義。立。つ。憎。む。当。家。の。聲。を。身。を。乳。を
を。知。り。政。能。が。死。を。乞。死。重。保。憎。む。者。オ。多。と。自。怨。居。る。知。り。
適。武。義。方。より。重。忠。野。心。の。斗。争。あ。り。都。の。風。波。と。終。言。の。文。を
送。り。お。救。の。方。は。幸。と。時。政。へ。邪。惡。を。勅。り。重。忠。を。聲。と。り。左。根
怖。る。縁。家。の。好。身。を。忘。れ。時。政。謀。反。の。志。あ。り。人。あ。り。由
緒。り。專。君。を。排。傍。し。政。能。が。死。去。を。乞。死。と。緒。り。當。家。を
仇。と。を。彼。者。存。命。あ。り。此。方。の。斗。争。あ。り。邪。智。深。き。重。忠。を。れ。を。
密。り。派。緒。り。も。妨。人。の。必。定。唯。今。の。内。を。除。る。び。後。日。の。愁。
殊。更。此。頃。當。家。を。亡。と。企。て。是。謀。反。人。を。り。と。管
終。言。せ。る。時。政。由。是。救。の。方。の。惡。謀。又。遂。に。隱。謀。の。深。旨。を。る。也

重たし智勇を思ふ害見とあふ気あはる。謀を廻じ。近國は流言
 とせり。後倉又逢はあり。襲ひまんととせり。とて後倉の
 兵具を綱へ用ひの沙はありと去觸とて武士亦所を守りんと。
 これゆくと後倉の群系を。時政相終の便に箱毛三郎重成を招き
 入道密意を受く。然と子依一族郎亦悉く引具し。後倉の就系
 諸人休怪し。思ふ近國す。静るる。入道時政が畠山を誅せ
 んとの内をさす。つ結人又結る。曰某一族亦を引く。あつては世上の風
 波後倉の静るる。柳もひ合るるあり。ゆへ用ひの為一家悉く
 引連馳する。如き。必定襲ひする。族有。と某同國の内を引
 められ者あり。され其の實態をそくぐれば。鹿忽と名ごり成り。用
 へる。とる。え。何れ。の。う。あ。ん。と。存。じ。右。の。仕。合。之。各。の。油。ひ。を。さ。す。
 ごとくありけし。なり。あ。へ。人。と。賊。と。あ。ひ。つ。り。騒。動。は。あ。ひ。教。日。間
 静るる。と。何。れ。の。う。あ。ん。と。あ。つ。と。り。

時政畠山を誅伐箱毛重成奸計畠山重保武勇戦死
 時と和田左エ門尉茂盛結人の恐怖世上の風は皆奸曲の亦為と
 あり。君へ上り。後倉中騒動仕る。奸計流言をさる者ありと
 言ふ。実と謀及人あり。攻めんと企て。於て。か。流。布。せ。り。松
 と。さ。り。む。む。の。後。倉。中。騒。動。仕。る。奸。計。流。言。を。さ。る。者。あ。り。と
 ても襲む者ゆえ。流言の流布あり。虚と云ふ。隠悪と云ふ
 んと巧みの。後倉の中と在と見え。早く群系の族を帰國せ
 め。静。繼。仕。さ。し。と。君。を。さ。す。台。を。旨。早。速。命。せ。り。依。て。あ。り
 五月三日。後倉を引取り帰國せり。諸人安堵のあひをほ。時政の隠

謀空しりれ。再び指毛を遣はる。入道又邪智をめぐじ。重忠又子と
殊せんとす。抑此度流言の斗義ハ定て重忠由幸國より我為らん彼
ハ大列あり一族郎亦餘多引く事あり是ハ風波の送臣を自山之
と。理不尽の殊戮見企るは重忠此度の風波ハ虚脱する人にと
悟り。國ハ安座して出まらざる。其巧を兼抄せざりしる。心て
けふ指毛入る。時故と示し合せ。重忠が手跡を似せ一通の書簡を
繕め。指毛を懐中し。武州に發す。指子を伺ひ居るは。六月下
旬。ぬくや合せしる。時政より似せ上使を仕立武義國に
下。重忠は謀反人の追討使を作らるべし。一族を引具。討
手の用意する。張倉の事。高命より云せらる。重忠は謀反人
と。竹者の竹園に在る。追伐せよ。よき事と尋る。使者密り

る。その姓名も住所もつけあはさる。張倉あり。仰命する。さくと
や。重忠不審する。畏る。事と傾掌を。然る。翌日。指毛入
道。重忠が菱谷の館に移向ひ。昨日張倉より使を以て。謀逆の軍
有由。守護の為。兵出づ。命せ。を討手の將ハ。元は作付
と。由る。其一族大羊張倉。在。併役する者。由る。由。此役
出府使。貴所。一族。催。師。主。張倉之急
する。重忠疑の。出府。人。為。入道。張倉
あり。尼公の。所。新。山。攻。郎。重忠。去年冬。頃。在
國。兵。器。を。調。郎。從。軍。の。調。練。を。教。目。由。
の。存。去。頃。風。波。在。送。臣。山。其。功。其。功
合。彼。不。實。存。夜。其。實。を



稲毛三郎
 重成入道
 白山の謀
 書披の
 家

及廷を企する。不意に去る年、能負殊戮の時、重忠二品の方、
 疾に走る。味方又集りて、忠を尋ね、天下の為と云ふ。其の兄子の
 固を存るべしと云ふ。然る今更何人の謀反を企ん、正直の積と云ふ、
 重忠乱れ、殺さず。やうに百あ、礼明の上、罪明白、殊せられ、
 べ。真偽を分ぞ、針手、向ら、其の、諸人の、幾論あ、又子、
 三人一同、練た、時政一言の返答、その、奥、入、
 皆力、退去、時政も、正路を守、兼時、詞、答、
 れば、改、と、此、も、空、と、牧、の、方、あ、
 縛、と、止、ぬ、
 又、對、の、練、不、孝、此、上、あ、彼、不、か、未、を、
 其、を、殊、の、の、除、と、種、を、を、を、
 自滅を拒

疎言取、急、
 有、
 羊、
 牧、
 夫、
 の、
 よ、
 聳、
 ら、
 中、
 を、



島山 重保
由比が
濱よ
我死の
凶

三浦義経二編卷之三

十六



三浦義経二編卷之三

十七

一物あるを。該次を獲の面。由比の濱。又亦支へ。八段。室中。よひと。
 告。先。一。年。の。知。る。よ。先。然。り。又。捨。難。動。と。静。ん。と。か。く。の
 ぞ。純。身。の。の。之。佐。久。間。小。次。が。軍。味。方。を。励。し。結。士。追。て。あ。る。べ。ん。を
 早。謀。及。人。を。殊。し。勲。功。の。賞。又。然。是。と。と。呼。り。く。挑。戦。ふ。又。四。度
 詠。ま。る。の。軍。勢。も。味。方。の。勢。又。氣。を。さ。り。直。し。再。び。重。保。を。追
 取。を。り。六。布。の。完。前。う。致。度。の。幾。又。時。刻。を。移。し。労。止。り。且。も。
 必。死。と。定。め。り。再。び。敵。中。に。突。入。り。四。角。八。面。又。強。廻。り。戦。ひ。し。ば。
 敵。勢。多。討。た。る。の。之。也。其。月。令。後。又。あ。ら。れ。ば。敵。々。不。の。城。を。悉。く
 取。後。亦。て。く。討。ま。し。移。り。畠。山。重。保。を。ま。と。之。と。馬。上。又。陸。の上
 常。切。え。短。刀。と。腹。又。突。立。真。倒。り。あ。ら。死。し。り。天。晴。大。膽。義
 肝。の。若。者。終。奸。の。舌。は。又。さ。り。血。の。死。を。遂。ら。ん。口。惜。れ。次。才。を。り。

佐久間小次が軍兵重保が首をとり。合戦の次舟住進せり。時
 政強軍の功と賞員し。重忠今日押あへし。途中より陣伐せん
 北条時政小条時房兩人たけあへし。葛西兵清尉清重千代
 平以兵衛尉常秀。大次郎。伊。原。信。岡。部。五。郎。胤。満。相。馬
 五郎。及。胤。東。平。右。重。胤。足。利。三。郎。美。氏。小。山。左。衛。門。尉。朝。政
 長。沼。五。郎。宗。政。三。浦。兵。衛。尉。美。村。宇。都。宮。弥。三。郎。朝。綱。筑
 後。左。衛。門。尉。和。重。足。立。九。郎。左。衛。門。尉。宗。長。新。田。平。次。美。季。川
 越。次。郎。重。時。宇。佐。兵。衛。尉。大。助。尉。祐。重。波。多。野。小。次。郎。忠。徳。小。母
 重。右。衛。門。尉。通。重。甲。三。右。衛。門。尉。季。隆。本。その。外。金。子。村。上。見。玉。横。山。黨
 前後の軍兵三万余人重忠が討ちて。純向へ。大軍を
 傳。大。乱。又。及。ぶ。平。家。追。討。の。功。又。の。要。兵。征。伐。の。討。を。り。

多し。時政邪惡ありて。賢臣を去りて。愚人を封んとす。かく
 軍勢を修むとて。南民樹は迷ひ。泣けり。声嗑しく。乱國の弊は
 て。怨怒慄々。東西は北南北北。此討伐の事。和田左衛尉
 義盛今朝より。所に在り。鹿忽の沙汰するん。種々言は
 らども。既ち重保と許。許は政敵。一とらるる。子細を弁ぬ軍
 へ。畠山が謀反相違。多たると。又。時政奸事と。族中。執持
 は白眼と。我牙の上を顧み。今上俄の。今朝發。直は
 殊伐の沙汰する由。一拜。義由。殊も。急る。而。再發の。同。殊
 殊更。尼。より。作。君の。教書。を。時政。諸臣。下。知
 と。傳。由。遠。背。の。軍。一。人。も。あ。ら。な。し。義。盛。ハ。乱。公。の。ど。く。り
 ろ。り。て。制。止。ま。ど。も。今。討。平。の。軍。勢。押。出。上。い。さ。り。り。の。義
 盛。力。あ。り。強。く。止。ま。同。意。あり。と。疑。は。俱。死。せん。由
 ぎ。会。ふ。お。ひ。お。も。む。由。折。盡。一。が。元。来。義。盛。由。討。伐。の。人。数
 ろ。り。し。う。ど。も。非。道。の。後。目。と。義。盛。と。怒。を。死。せ。し。不。の。ち。後
 と。く。後。余。止。り。只。管。終。者。賢。臣。と。如。ち。の。害。と。歎。悲。し。し
 大江。慶。元。胡。臣。と。折。り。折。由。種。と。献。ア。う。ど。も。尼。は。用。ひ。る。

時政の斗ひは。任せ。義盛。其。憤。は。迫。り。る。非。非。る。

振子をえ。合。り。る。

武州二聯合戦 畠山重忠武勇戦死

此時畠山次郎重忠。家の子郎。亦百三十餘人。折。由。甲。曹。と。も
 思。せ。ど。是。の。時。政。の。人。民。亦。恐。怖。の。お。ひ。り。る。一。めん。為。之。歎。又。今。日
 午。の。刻。武。藏。國。二。膝。川。の。辺。に。義。盛。の。振。子。を。討。り。六。郎。重。保

星月夜二編卷之三
 十六

が郎ホ一人。今幸々由比濱の戦場を遁走。その翌は初逢し
 完結の抄子。観者の不為あり。君をも録し。あつんと。後念乃
 大軍雲霞のごとく。押付らるる来也。早々引返し。つくと。住進
 せしむ。日未物も動ぜぬ重忠も。一度は女を驚か。何ぞぞ
 らん。おれまゐるのわんと。我子孫命よ。あの上の。尹うこそ。安
 安穩う。天あり。命を。悲歎する。甲斐あり。と。観念し。覚
 と。寤め。辨るれば。郎ホども。あつと。さるる。周章。騷るる。か
 奉。次郎。非常。主人。向ひ。中賢。意のごとく。衆人の。不為あり。
 依て。非道の。討ふ。を。向ふ。さるる。さるる。も。云。釈。彼。べ。う。と。若。殿。討
 せ。ぬ。ふ。う。う。う。ん。が。悔。て。帰。ら。ぬ。ま。う。る。と。討。ひ。の。幣。袋。千。万。の。数
 ま。う。ら。む。味。方。の。僅。百。三。十。餘。人。の。討。ひ。に。對。し。て。は。施。さ。ぬ。戦。ひ。の。ち

死し。ぬ。らん。と。せ。え。う。の。武。名。を。賤。の。果。あ。つ。ん。早。く。退。兵。さ。る。と
 う。と。練。言。と。重。忠。笑。々。其。後。甚。妙。さ。る。と。ど。これ。生涯。非。美
 非。道。の。と。ら。ぬ。せ。が。て。正。妙。を。み。て。宋。と。歸。る。間。も。私。の。命。を。換。は。し
 精。忠。を。守。る。と。い。ふ。と。も。實。の。罪。を。知。り。死。せ。んと。す。是。天。の。命
 何。と。恨。む。と。さ。る。若。今。本。國。に。引。返。し。防。城。を。あ。が。り。さ。る。と
 隱。謀。ある。と。似。し。る。虚。命。忽。ら。實。と。さ。る。と。不。忠。の。臣。と。呼。ぶ。ん
 と。死。後。の。悔。し。ま。し。玉。を。碎。く。も。その。潔。き。を。現。さ。す。と。い。ひ。終。者。の
 為。に。換。死。さ。る。と。も。信。義。を。失。ふ。べ。う。と。い。ふ。が。公。の。潔。白。は。神。明。克
 眼。見。あ。る。と。封。手。ある。と。も。甲。冑。を。帯。は。る。と。さ。る。と。我。完。結。の。正
 直。を。取。り。え。んと。欲。さ。れ。ど。此。後。叛。を。交。ん。も。武。勇。さ。る。と。い。ふ。と
 封。手。の。大。勢。さ。る。と。い。ふ。と。朋友。と。い。ふ。と。耻。ある。一。戦。を。知。り。し。その。後

死を告ぐる守りんと。郎従りらるも。鶴ヶ峯の麓に屯す。か
 由勤心。旅の酒肴をとりあむ。云静に完功の盃をとり。子
 死を慕ふ祥由る。封牛の大軍は思ひきき。顔なき常乃
 づくみく。云の強ざる。茶山のどく。城は希代の大丈夫と云つ
 べし。時よ襲来る軍兵。先陣を志ざらそ。勇士の習ふれ。皆
 重忠の信義の鏡と。呼ぶ。羽軍は。封牛と。向ひし。るんが。
 進んで。幾人と。いふ。あり。且。重忠の勇威。怒る。軍も。数
 多る。されども。味方の三万餘の大軍。敵を。見。は。百四十人
 ほど。あつ。甲冑の。一人。あり。と。れ。よ。ろ。各。不。審。り。謀。叛
 を。企。て。強。兵。を。攻。め。んと。い。ふ。の。僅。に。百。四。十。人。と。い。ふ。と。さ。う。く。
 殊。に。甲。冑。の。兵。多。り。つ。と。さ。ま。ま。其。の。虚。名。も。や。と。れ。ど。も。ら

時宜よ。及んで。止む。さ。や。も。り。と。以。て。軍。を。と。め。ら。る。中。も。
 更。ま。た。左。歩。尉。景。盛。林。九。郎。郎。ホ。野。田。与。市。加。治。次。郎。辰
 間。大。郎。鶴。見。平。次。王。村。右。郎。同。子。藤。次。ホ。屋。敷。の。兵。を。連
 主。役。七。騎。真。先。は。進。ぶ。幾。ん。と。重。忠。を。見。て。今。は。進
 び。藤。九。郎。入。道。が。男。あ。り。弓。馬。の。友。に。万。人。は。抽。て。先。は。向。ひ
 志。感。ず。る。と。堪。へ。と。奉。答。標。に。又。命。じ。銭。し。む。ま。矢。を。飛。し。
 死。生。を。争。ひ。し。が。重。忠。方。の。甲。冑。を。見。せ。る。由。一。刀。劍。の。残。を。好。し。
 箭。を。止。め。入。り。切。ら。る。その。勢。は。尖。り。く。當。が。く。系。盛。致
 是。引。退。く。重。忠。統。率。を。下。す。美。時。が。後。陣。も。心。も。切。拵。ん
 と。進。り。る。系。盛。が。亦。ホ。加。治。次。郎。辰。間。太。郎。兩。人。味。方。乃
 敗。北。と。怒。り。し。ま。よ。と。り。命。を。る。の。軍。も。れ。ハ。臆。病。の。呆。半。動



山崎の戦い

九



富山重忠
完秘
合戦
勇力と
あそ
図

富山重忠

九

あぐくうぐ。敵も敵もあぐくうぐ。勇名なき島山より手前も討
 死せんへ奉りてくるべし。いざや大お見見えんと士を十を
 戦へしめ。遠を何ひつと近ぬけ。重忠も討くがれ。さうた覚
 と笑ひ。社と知る振舞天晴くと。自ら兩人をおめ。誓く
 挑戦し。武勇徳倫の意忠。いざや永く敵をぶ。友人とも
 太刀うちあつたれ。独りてあ方より。重忠も細竹より。重
 忠左の幸も加作が首筋を締つ。右幸とのどほろが上帯。能
 けも勇力を死へし。片手業も眼より高くう上。二丈より
 投せんべ竹うへへくくるべし。五躰碎て即時も死にけり。う
 加治次郎。いづもくと重忠と刺通えとあせり。けんた。両手
 うめも締りし。骨も碎る振も是れ。働りぬると。重忠短刀

川抜き陪臣もれども。志も。一死体か志。重忠も組で死するへ。
 面目もどれどと云つ。首を掻切り顔色変ぜど。悠長く。形
 勢の戦も。双の勇士あり。後食部の大軍を先陣。は。三
 二陣入替り。二陣疲且。三陣進。責残み。凡午の刻より。申の
 刻より。あぐく。数度の軍も流石。重忠の死。幾多。は。後食勢三
 度中。敗績し。討死。手負。数を。と。愛甲三郎。季隆。を
 え。所詮。重忠。死。と。軍。の。刀。短。の。戦。を。へ。と。由。後。も。敵
 する。の。あ。ぐ。く。連。は。射。と。ん。と。小。高。れ。如。し。死。上。り。能。く。見
 す。矢。を。放。つ。と。而。中。手。練。の。季。隆。が。け。し。遠。く。重。忠。も。右
 の。腕。と。う。も。服。後。よ。と。立。り。體。を。悪。く。する。ん。が。深。く。と
 射。通。え。ん。大。丈。夫。の。重。忠。も。深。手。も。弱。り。是。中。も。と。所。を。志。め。

つ。腹掻切て死うらる。元久二年六月廿二日。生年四十二歳。
 嗚呼今日つらる日ぞや。奉朝例少は賢良の忠臣奸徒
 の為よ身と亡と。天又まんをを憐むるや。秋氏よま去の因
 縁と親由宣るもむる。さればまの因縁を知らんは欲せ。改世の
 果をとんぶ。重忠智深く。仁厚く勇烈なり。徳美廉直の
 武士るれども。牧の方の悪念。小山朝推はれた。幾時時政頼毛か
 拙れ奸斗よ。そ実の罪を引け。中沢るもんあ。日比の生質皆
 存の如く。明白るも。重忠前同の報りて。道は難きをを
 ろ。云訳なるが。殊よ重子重保誅せられ。人間のうらひ子を
 失ひ。悲しむ。後人を思は味。未だの罪ともうらむ。と。
 覚悟を究め討死す。滅は四相を悟ると。そ本の上紙や云と。

既よ重忠討死せり。か家の子郎木我もくと討死自書。白
 木主人あひの士卒也。一人も命を惜むるもの。死亡し。後よ。
 重甲三。重忠の首とす。相州美時よ渡を。美時え。の終末
 の首とえ。旧好とあひ出。同よ。流候よ。及び軍よ。務
 ても美勢あり。三万余の軍士も。然傷の聲。悲歎の声を勝
 関と。志高く。幾余よ。涙。大切ありて。寸罪多。名士
 と害し。人本石よ。あ。罪。を悲む。んや。牧の方時政頼
 毛か所。更よ。倫の道よ。遠し。一向評。るよ。及。知る。討
 年の緒。お。後。愈よ。帰。大將美時重忠か首と。所
 持。合。の。次。を。上。時。和田美盛。君前よ。出。美時
 への。討。年の。終。士。お。重。忠。か。完。効。の。形。勢。を。同。身。ね。る。よ。畠

山後二百二十余人甲冑をもたせど一人も遁走せし。然く討死せし。一同に中演て各然傷を催したるあり。其盛怒の候を押へ君に向ひ。さうも忠義の名士。其実の饒害よりひぬると。討ふの法士ホカキ上りぬり。や。百一をせり。送を企るりの。その手もと達せん為國と出後余を襲んとする。牙の一族をも信さ。郎ホとも重忠の一手を集め。二千余あり。及ぶべしと。後よ百三十余人を引連甲冑もせり。其のあふる。その上將を保とせり。別是一向合戦の用意とせり。とりて送する。其条明白に加之。途中あて不意に討ふを引ま。さ。色中を送する。さ。勇をの若る。さ。其実の罪を念よ。且ハ皇子の亡命と。叶ぬとも奉國より返す。堅固は彼て防戦をさる。さ。重忠の智

勇郎徒ホ一人當千の志。要害は靠て残ん。味方大軍あり。十日廿日と。其。先年城小右郎。盛越後國を坂の城に籠り。叛逆を企。坂頼女に女支の敵あり。討ふの軍士毎度利を失。重忠らとせ。途中に死を清く。甲冑もたせ。其期に礼を失。私る。其。君の為天下の為。柱石。賢士と亡。君の片腕を自ら引。残念と。國家の不幸。非。皆倭人後者の。君。若年。在。其。大臣を。害。國家の患。起。乱世の基。故幕下。遠天の時。草創。古今例。日本の懸。後。他人の掌握。重忠。の。臣。

